博士論文要旨

氏名	宮本　桃英
学位の種類	博士（人間科学）
学位記番号	甲第11号
学位授与年月日	平成23年３月17日
学位授与の条件	神戸女学院大学学位規程第５条１項の規程による
学位論文題目	おとぎ話における音と音楽 ―「歌」と心理臨床の場で語られる言葉との関連から―

論文の要旨

おとぎ話にはさまざまな「音」や「音楽」が表現されている。本研究の目的は『グリム童話』と『日本の昔話』を素材とし、「歌」の表現に纏わる意味と心理臨床における人間の語りとの関連の可能性について検討することである。さらに「歌」の共通性と相違点を明らかにすることによって、日本と西洋における「歌」「歌うこと」についての特徴や意味づけ、加えて人の心の発達と成長との関連性について考察した。

第１章ではおとぎ話には人間の発達過程や乗り越えるべく心の発達課題が映し出されており、そこに表現された人間の（心）の成長の姿と、今を生きる私たちが自身の心と重ね合わせる体験を通じて、自分にとって重要な何かに気づくことも可能であり、このような情緒的経験は心理臨床の場面に通ずるものもあると考えた。第２章ではグリム童話において登場した音や音楽をひとつずつ取り上げた。幅広い音の数々は音源を基に「音の種類」として、物語の場面ごとに果たす役割については「音の機能」として分類が可能なことを見出した。音の種類はa. 自然の音、b. 動物の鳴き声・歌、c. 楽器の音、d. 人間の声・歌声、e. その他の音に分類した。音の機能はa. 導き（音が物語の展開が生じることを導く）、b. 惑わし（登場人物たちが意識では捉えられない感覚によって動かされ何かが起こる）、c. 力を使う（主に楽器の力が何かを引き起こす）、d. 何かを思い出す（主には離れ離れになった男女が再会を果たし重要な内容を思い出す）、e. 真実を明らかにする（重要な一連の出来事の真実が明らかになる）、f. その他・不明（aからdに分類できなかった）である。さらに種類と機能の結びつきを両者の側面から分析した結果、グリム童話における音・音楽に纏わる意味として「意識か無意識」「現実世界か内的世界」などどちらかの領域に存在するのではなく、両者の世界を行き来し必要に応じてそれらを繋ぐ「架け橋」になり得ると考察した。第3章ではグリム童話と同様の方法で日本の昔話に登場した音や音楽について検討した。音の種類では「天界・異界の者による音・音楽」を加え、機能では「惑わし」がなく、「何かを得るための音・音楽(音の表現によって何かを得る、褒美か罰かの決定を得るなど)」の

機能を加えた。日本の昔話における音・音楽の独自の特徴は、人間の声・歌声が幅広い機能を担っている点、音の担い手の性役割および人間と人間以外の世界を生きる者の働きの区別が曖昧である点である。グリム童話と日本の昔話の代表的な共通性と相違点として「人間の声・歌における共通性と相違点」「楽器そのものがもつ意味の共通性と力の質における相違点」、この2点に関連して「音の表現者・聴き手に関する相違点」などが考察された。例えば人の声や歌により出会いが導かれ展開が生じることや重要な真実が思い出される機能は共通してみられるが、グリム童話では声を発するのは女性・聴き手は男性であるのに対し、日本の昔話では老若男女が声を発し聴き手は男性に限定されないというように音を表現する者と聴き手の性別が異なる点などである。第4章では「歌」に着目することを通して、人間にとっての「歌」「歌うこと」について考察した。歌は時間・空間・異質なものの狭間に存在し「繋ぐ役割」があると考えられた。繋ぐ機能としての歌は心のさまざまな要素を繋ぎその人にとっての変容や成長を支え、心理臨床における言葉との関連も考えられた。おとぎ話に登場した歌は、その言葉だけでも事実内容は明らかだが、言葉の内容だけではなく「いかにして歌われたか」が重要だということがわかった。そして心理臨床において転換点となるようなときに語られる言葉は、限りなく物語の中の歌の機能に近づくのではないかと考えられた。同時に「いかにして聴き手となるか」ということの重要性を心理療法のクライエントとセラピストの相互作用と関連づけて考察した。心理臨床における相互作用を検討していくうえで、本研究で考察してきた「心の中の歌い手と聴き手」という視点もまた新たな示唆を与えてくれるのではないかと考えられた。第5章では「歌」に焦点をしぼり比較文化的な視点から日本人と西洋人の「歌」「歌うこと」における相違点の考察を試みた。「歌い手と聴き手」の性差が対照的である点は担い手そのものの顕著な特徴の差異とも関連した。これらの内容は「歌」を通じて、人がいつもは意識することのない心の一側面を知り、それを自らの心に取り戻し人として心の発達を遂げ変容することにもつながると考えた。以上のような相違は、心の葛藤や課題の克服の仕方など心理臨床においての相違としても反映されているのではないかとも考えられた。歌の共通性と相違点は「歌」あるいは「歌うこと」の本質が心の深層に存在しており（共通性)、外界に向けて表現されるときに相違点として現れるのではないかと考えた。心理臨床の場における西洋人と日本人における象徴としての「歌うこと・聴くこと」「心の中の歌い手・聴き手」の特徴や相違点として視点の可能性は、臨床経験を通して今後さらに検討していくべき課題だと考えられた。